



## 夏休みの読書感想文

校長 中山 正之

夏休みが終わりました。長いお休みの間、子ども達がどんなふうに過ごしたか、どんなことを経験できたか、これから教室でたくさんのお話が聞けるとおもいます。また、宿題や作品など学習の成果も提出されます。その中には読書感想文も含まれているかもしれません。

夏休みの宿題といえば、昔から読書感想文が付き物でした。「夏休みにはたくさん本を読み、感想文を書きましょう。」と、担任の先生は言います。そして多くの子ども達は顔を曇らせます。私もその一人でした。そして8月の後半までそれがあつたことすら忘れて過ごし、母親に言われて突然思い出し、しづしづ本を手に取り、学校が始まる前日までかかってなんとか終わらせる。毎年判で押したように同じことを繰り返すのです。私の場合、中学2年までそれが続きました。しかし、中学3年の時に書いた読書感想文だけは少し様子が違いました。

その年の8月、受験勉強から逃げるために本でも読もうと、私は家の本棚にあつた『芥川龍之介集』を手に取りました。その中の短編小説を読み、ついでに読書感想文を書いてしまおうと考えていました。そして目次から『鼻』という短編を見つけました。話が逸れますが、私は子どものころから鼻が大きく、友達によくからかわれていました。それがコンプレックスとなり、自分の鼻が好きではありませんでした。そんなこともあり、『鼻』という素っ気ない題名に、何か惹かれるものを感じました。

この物語は、人並み外れて大きな鼻を持ち、そのことに悩むお坊さんが、ある方法を使って自分の鼻を一度は小さくします。しかし・・・という内容です。そこには人間の自意識や利己主義といったテーマがあり、中学3年生ならその部分を読み取ってほしいところです。ところが私にはお坊さんの心の変化が読み取れず、読み終えた途端自分の鼻の悩みと重ね合わせ、「せつかく小さくしたのに。すごくもったいない。」という思いにとらわれてしまいました。そして勢いにまかせて、感想文を一気に書き上げました。細かな内容は覚えていませんが、それは読書感想文ではなく、お坊さんの行動や自分の鼻についての不満を書き連ねた、大変出来の悪い作文だったはずですが、「僕は『鼻』という漢字がきらいだ。この字が自分の鼻の形に似ているからだ。」とまで書いた覚えがあります。今となつてはよくあんな代物を提出したものだと思いませんが、その時には「思ったことを全部書いた。」と満足でした。ただ、選考のために作文を読んだらしい図書委員の同級生に「中山君の悩みがよく分かつた。」と言われ、とても恥ずかしかつたことを覚えています。

それ以降、夏休みの読書感想文を書くことはありませんでしたが、本棚の『芥川龍之介集』は、何度も手に取るようになつてきました。著者の有名な作品の多くをこの本で読みました。また、『鼻』は何度も読み返し、お坊さんのことを考えてみたり、自分の鼻のことを考えてみたりしました。「良い本に出会う」ことが読書感想文を宿題にする目的の一つなら、私にとっては大いに効果があつたのだと思います。この本は今でも私の手元にあります。

稲荷台小の子ども達は今年の夏に、どんな本を読んだのでしょうか。感想文も大切ですが、心に残る良い本に出会えた夏休みであつてほしいと思います。